

木の皮をかじり冬を越すニホンザルこ

一月ともなると野山は一面雪におおわれます。山の動物たちの中には、ツキノワグマのように木の洞ほらなどで冬眠するものもいれば、カモシカやキツネのように雪の中で生活するものもいます。冬、ニホンザルはどんな生活をしているのでしょうか。

世界でもっとも北にすむニホンザル

サルねったいの仲間の多くは、熱帯から亜熱帯あねったいにすんでいます(図1)。温帯おんたいの日本列島にすむニホンザルは世界でもっとも北に分布するサルで、南は屋久島やくしまから北は青森県下北半島しもきたまで見られます。富山県には、東部

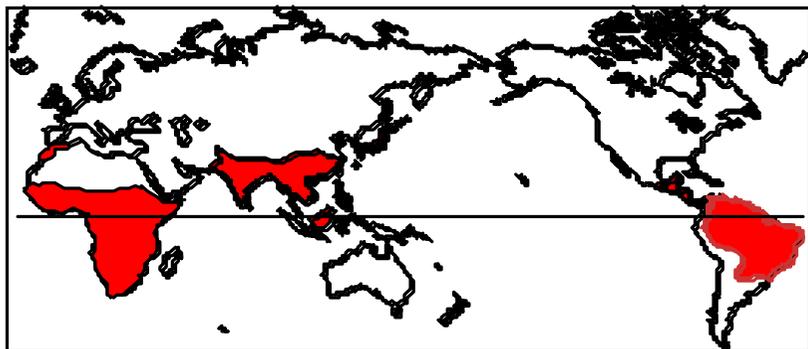


図1 サルの仲間の分布

の山地に70以上の群れがあわせて2,000匹以上生活し、そのうち、黒部峡谷きょうこくには31の群れがすみます(図2)。明治時代には県西部の五箇山地方ごかやまにもすんでいましたが、今では見られなくなりました。ふつうは数十頭の集団で生活しますが、ときどき群れから離れたサルが見られることがあり、呉羽山くれはにもやってきたことがあります。冬ふゆの生活

ニホンザルの食べ物は、草木の葉、木の实、種子、昆虫などです。北陸地方の冬の野山は、草木が雪におおわれるためエサをとるのがむずかしくなります。積雪が少ない間は、山の斜面で草の芽やササの葉、秋に落ちた木の实などを食べ、積雪が多くなる真冬には、春から秋はほとんど食べない木の皮や冬芽を食べます。サルに皮をはがされた木の枝は遠くからでも白っぽく

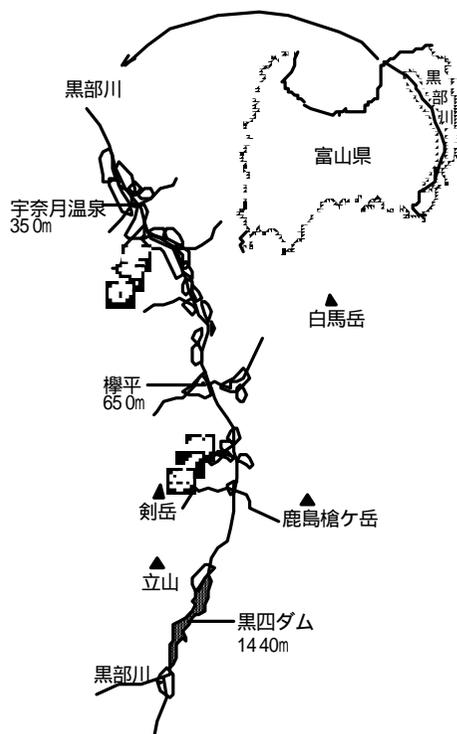


図2 黒部峡谷の群れの分布(○の部分の一つの群れ。峡谷ぞいに31の群れが生活します) 赤座(1987)より

見えます（図3）。^{はくさん}白山のニホンザル（オトナのメス）では、11月に10 14kg あった体重が2月には平均で2kgも少なくなった例が知られています。体重の^{げんしょう}減少は、^{しぼう}脂肪ばかりでなく筋肉もへらし、まさに身をけずってきびしい冬をすごしていることがわかります。

冬は雪が多いので行動^{はんい}範囲がせまくなります。吹雪^{ふぶき}の時は、木の上でたがいに身を寄せ合いじっとしていることが多くなります。気温の下がる夜は、寒さをふせぐため木の上でかたまって寝ます。雪の中を移動するとき、一列になり前のサルが雪をふみかためた^{あと}跡を歩いていきます。このようなサルたちの行動から、冬はなるべくエネルギーのむだを少なくして生活しているのがよくわかります。

春が間近になっても、雪どけがおそく^{ねゆき}根雪の期間が長びくとエサがとれません。そのため、冬の間^{しょうもう}に体力を消耗したサルにはますますきびしくなり、体力の弱い子供や年老いたサルの死亡率が高くなります。また、秋のブナの木の実やミズナラなどのドングリは、冬を乗りきるための大切な食べ物ですが、毎年豊作とは限りません。不作の年は秋に十分な食べ物がとれず、いつもの年よりも冬の生活がきびしくなります。雪国で生活するサルたちは、新芽や若葉などのエサが豊富になる春を待ちわびていることでしょう。（南部 久男）



図3 皮をはがれされた枝とニホンザル（黒部峡谷、加藤満氏撮影）
雪の多い冬は、木の皮を食べてうえをしのぎます。



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31 TEL(0764-91-2123)
ホームページ <http://www.tsm.toyama.toyama.jp>

平成11年1月5日